

古之御礼御請中聞候 此段申上候 以上

七月二十二日

山崎嘉四右衛門

甲斐孫作

「資料そのも」は、先日七月十五日野田村大庄屋清左工門へ申渡されたことが、その通り確かに実行されたことを、御香頭佐久間徹古工門へ報告した（山崎嘉四右衛門）甲斐孫作の「覚」である。日付が七月二十二日となつてゐることから、かなりスピーディーに事が運ばれたのであらう。

この覚には、資料そのもで「藉勸進勝手次第」と記されていたのが、「物を等」と変つてゐる。そして「家内之者迄御免被、成下候」が、追加された形で記されてゐるのだが、この物乞いが勸進とどうちがうかであるうか、いづれも孫作が書き残した文書であることから考えれば、内容的に大きな違いはないと思つてゐるが、よく分らないのである。

結びにかえて

以上で「葛原へ盗入を捕えに行く事」と終らざるを得ない。というのは、孫作の書き残した文書には、これ以外河も記されていないからである。盗入仁左工門が、いつ、どこで、どんな盗入を働いたのかは分らない。そして突破りとした後再び召捕られた仁左工門が、その後どうなつたか不明である。いづれ「佐伯藩御仕置帳」が公開されれば明らかとなるであらう。そうした点から分らないにしても、犯案に対する当時の熱心な対応の仕方、（甲斐孫作の人柄もあるであらうが）犯罪解決への積極的協力者に対する、藩庁の賞金支給等の態度は明らかになり得たと考へてゐる。

しかしその反面、不明な点も数多く残つてゐる。資料そのもに於てくる「波当津遠見番人」もその一つである。ご教示、ご指導下さることを心からお願ひ申したい。また本論中、不十分な点の幾つかは、今後「その二」「その三」と書いていく中で、少しづつでも研究を進めて解消していきたいと考へてゐる。（以上）

記録

藩祖高政公三百五十年祭

— このような催しがあった —

◎ 毛利神社 例祭

十一月十六日、例年のように文化会館の和室で、毛利神社（祭神高政・高慶・高標・高恭四公）の例祭が執行された。参列者は旧士族による矢筈会の方々約三〇名、史談会からは高木・羽柴の両氏が参列した。

いづれでもないが、藩祖高政公は寛永五年（一六二八）のこの日、江戸でなくなられたので、毛利神社の例祭日と定められ、今年も三百四十九年である。祭事・年忌としての行事は、今年執行されたわけで、祭事終了直後にはおたりの矢筈会の山中会長が下重にご挨拶され、とくに高政公の偉徳をたたえられた。乞うてその原稿をいただいたので、本記辟頭に掲げることにした。

かつて毛利神社は城山山頂に社殿をもつてゐた。それが終戦ま近、被爆し炎上、今は五所明神社に合祀されてゐる。以前のようには城山山頂天主台、あるいは城址の一角に、社殿造営のことが進められてよいのではあるまいか。矢筈会が卒然し、広く崇敬者を募り、淨財を集める——そんな思いが湧き起つてくる。（羽柴）

⑤ 養賢公三百五十年追遠忌

同じ日の正午から毛利家菩提所養賢寺では、開基高政公の三百五十年遠忌が厳修された。佐伯南郡より多数の僧侶列席、読経裡に追悼法要がはじまり、片岡老師は次の香語をささげられた。

開基養賢寺殿

三百五十年遠忌

香語

莊嚴 豊後活機先

透得 三朝養聖賢

覆被 國家遺徳跡

威風 三百五十年

露 龍潜叟

の今も、ひとしく佐伯人士に仰がれている。

終った後本堂一ぱいで、僧侶の方々上席に一般檀信徒、供養おとぎの座があった。しかし、三百五十年遠忌にはおたり、藩祖を追慕する講話の一つもなかったのが、何か物足りぬものを感じた。

ただ、養賢寺から「龍鼎山養賢寺古事録」がくばられた史談会からは「藩祖高政公を偲ぶ」を、参列者全員にさし上げることをした。

なおこの日、歴代藩公の位牌堂の上段に、高政公の木像が調扉されていた。見つけ左様(羽柴)は参会者皆さんにお知らせして、ご案内申しあげた。外はしとしと秋霖の降りつづいた一日であった。

⑥ 藩祖を偲ぶ史料展と講演会

高政公は、何といつても佐伯開市の大恩人である。しかし、鶴屋城の築城や城下町の造成には、開ヶ原の戦い直後の毅然たる情勢下、かなり性急に事を進めるため、臣下・百姓たちばかり無茶なことをしたように、誤まり伝えられていることが、民間に流布されてきたようである。この際、高政公の人間像を見直そうとしたのが、史談会の三日間の行事であった。

(去年三五〇年の記念行事が大々的に行なわれたこと、当初予定していた藩祖の遺品展は去年に、というこに修正した)史料展は、主として慶長・元和年代高政公の巻一衣披書、お籠書の類いと、古文書の本物と、次の方々のご整理解あるご協力によって、市民に展示することが出来た。

高畑 深矢内記氏 百枝 吉田孝作氏 中島 河野松男氏  
上浦 渡海井公民館 大島 神崎信房氏 滝代 高宮氏  
古文書そのままであれば読めないところ、読解したプリントが後に立ったと思ふ。(戒事あり)しかし展示物の性質上、入場者は多くなかった。

しかしその三日間、その会場で次のような講演があった、首題について教えられるところが多かった。

期日	時刻	題目	講師
第一日 十月二十一日	九時	毛利高政の人となり	佐藤賢一氏
第二日 十月二十三日	十時	養賢寺古事録より	片岡省念老師
	十時	毛利高政の築城	小野英治氏
第三日 十月二十四日	十時	毛利高政の民政	羽柴 弘氏

なお、会場でくばった「藩祖高政公を偲ぶ」プリントには、鶴屋展史による高政公年譜も入れてあるので、いろいろな点から高政研究に役立つことだろう。ご利用願いたい。